

ニッポン  
ドクター和の  
臨終図巻



長尾和宏(ながお・かずひろ)  
医学博士。公益財団法人日本  
尊厳死協会副理事長としてリビ  
ング・ウイルの啓発を行う。映画  
『痛くない死に方』『けったいな  
町医者』をはじめ出版や配信な  
どさまざまなメディアで長年の  
町医者経験を活かした医療情報  
を発信する傍ら、ときどき音楽  
ライブも。

355 デザイナー 桂由美

# これ以上の「生涯現役」はない

僕が副理事長を務める公益財団法人日本尊厳死協会では、TBSラジオとYouTube(ユーチューブ)にて【My LIFE! My CHOICE!!】という番組を制作しています。安東弘樹アナウンサーをMCに、著名人をお招きして死生観などをお話しいただくトーク番組です。僕も、医師として終末期に関する解説のため、毎回収録に立ち合います。その番組のプロデューサーからメールでこの方の訃報を知りました。〈5/14に出演予定でした桂由美様が大坂出張中に死去されたそうです〉。

会って、若さの秘訣(ひけつ)をお伺いするのを楽しみにしていました。それがまさか、お会いする前に旅立たれてしまうとは…。

プライダルフアッションの先駆者



として世界で活躍したデザイナーの桂由美さんが4月26日に亡くなりました。享年94。死因については、生前の本人の意思により、明かされないそうです。

僕との番組共演は叶いませんでしたが、桂さんは、亡くなる4日前の4月22日には『徹子の部屋』の収録をこなし、前日には大阪でお仕事をされていたとのこと。

『ミヤネ屋』の報道によると、1カ月前の読売テレビの取材で、「いま、一番の問題は食べるものがちっとも美味しくなくて、食欲が減っているということはやっぱり体力とか気力を減退させてるんじゃないか」と、珍しく体調についての不安を吐露していたということです。

どんなに穏やかな最期であっても、徐々に食べる量は減っていくもの。それは動物も人も同じで、とても自然なことです。

特に老衰の場合は、余命1カ月あたりから、ほとんど食事が摂(と)れなくなります。嚥下(えんげ)機能も低下し、むせることも増えてきます。その時に周囲の人が、「食べないと弱ってしまう」と無理に食事や点滴をさせれば、かえって身体的な苦痛を増やすことになります。

食べられなくなったら、食べたいものを、食べたいときに、少しだけ。それが穏やかに枯れていくためのコツです。桂さんは、もう食べられないと自覚しながらも、亡くなる前日まで仕事をこなしたのですから驚きです。1日も寝込むことなく前日まで仕事をしていたのですから、これ以上、「生涯現役」という言葉がふさわしい生き方はないでしょう。

「生涯現役で終わりたいけれど、何に注意すればいいですか?」という相談を時々受けます。しかし、生涯現役というのは望んで手に入るものではありません。肩書だけならば棺桶(かんおけ)まで持っていきけるでしょう。しかし、「俺はまだまだ誰よりも働ける!」と仕事に執着するのは老害と呼ばれます。99%の人は、桂さんのようには生きられないと自覚しましょう。レジェンドは最期までレジェンドでした。